

みえ不登校支援ネットワーク
ネットワーク参加団体からの「いじめの声」
(平成 25 年度いじめ対策等生徒指導推進事業)

当ネットワークの平成 25 年度の取り組みとして、これまで「いじめ」に関わった方々の声を集め、県内各学校のアンケート調査により教育相談ご担当者様の方々からの声も集めさせていただきました。さらに当ネットワーク団体からも「いじめの声」も集めさせていただきましたので添付させていただきます。いじめへの取り組みのための一助にしていただければ幸いです。

「教育・いじめ問題に関心のある方々に、その取り組みへの一助としてご利用いただきたい」「みんなでいじめについて考えるための材料にしていきたい」と考えております。

なお、当ネットワークからの「いじめの声」は、参加団体から寄せられた「それぞれの声」であり、当ネットワークの統一的な見解ではございません。ご了承くださいますよう、お願い申し上げます。

「みえ不登校支援ネットワーク」参加団体からの「いじめの声」

○よく使われる「いじめの四層構造」には疑問である。傍観者は、単にいじめを見ているわけではなく、ヒヤヒヤしながら見ているのであり、自分がいじめられないように身を守るためにそれを選択していることがほとんどだ。傍観というよりも、いじめは「すぐそばでの体験」であり、いじめっ子の隣の席でおびえていることだってある。またこの構造は、いじめを「子どもだけの問題」として処理してしまうのに都合がいい。いじめには、いじめっ子の育ち方、学校の雰囲気や価値観、教員との関係、保護者との関係、子どもを取り巻く社会の価値観など、多くの要因が絡まっているのが通常である。子どもだけの問題として考えている限り、いじめの根本的な解決はされないだろう。

○いじめは、愛されずに育ってきた子どもが首謀者になることがほとんどだと思う。一見、物質的にも恵まれ学習環境が整っているような子どもでも、自分のありのままを愛されていると実感していないことはたくさんあると思う。自分の命を大切にされなかった子どもが、他者の命を大切にするのだろうか。根本問題は、学校以前の、子どもの家庭での育ちにあって、それに学校生活でのストレスが上乗せされて発生してくるのだと思う。家庭の在り方や保護者の子どもとの関わりを変えてもらうのが一番の方法だと思うが、なかなか実現は難しいかもしれない。社会の側から家庭に代わる暖かい関係の場所が提供できればいいと思う。その場所は学校ということもありうるけれども、学校にこだわ

る必要もないと思う。

被害者の安全が当然大切であるが、根本的には、加害者が家庭で体験できなかった「安全・安心の関係」を提供できるように社会が動くことも大切だと思う。

○先生はいろいろな評価に悩まされていて（テストの結果やクラスの子どものクラブ活動での活躍、不登校、いじめ）、うつ病になっている方も多い。従来の教師への様々な評価基準（暗黙の評価が多いが）を変えていく必要があると思う。

いじめのことで例を挙げれば「いじめが起らなかったことを評価する」のではなく、「いじめに対してうまく対応できたか」を評価するようにすれば、いじめを見て見ぬふりをしたり、隠したりせず、対応に力を注ぐようになるだろうし、その結果を教育現場で共有し、次につなげていくこともできると思う。

いじめは大抵多くの人数が関わってくるし、巧妙に仕組んでいることもある。それを担任教師一人に対応するのは不可能に近い。担任一人で抱え込むのではなく、学校内でチームを作るなどして、複数人に対応すればよいと思う。そのためにも「いじめが起らなかったことを評価する」という価値観を改めて、「対応を評価していくこと」が必要である。

○被害者の親は、一步も引かないという態度で、加害者に対して言うことが必要で、それを支援として後押しすることもある。保護者のほうで腹が据わっている場合には、学校に行かなくてもいいという判断も可能で、そのような時に親子の関係がよくなる。

○まずは被害者を守ることが必要。危険なところから遠ざかることが先決で、それが許されることを伝えなくてはならない。

○雰囲気の良い楽しいクラスではいじめは起きないと思う。教師もまた学校での生活を楽しめるようになってほしい。あまりにも多くの負担から、教師をできるだけ解放されるような仕組みを作っていくべきである。うつ病などによる教師の休職や退職が少ない学校を評価する仕組みがあるといいと思う。

○人が集まっているところでは、どうしてもいじめが発生する。学校だけでなく職場でも起こる。システムの問題ではないところがある。それは動物の世界でも同じ（鳥の群れでもいじめがある）で、人間も避けられないと思うし、子どもたちもどこかでそれを分かっているのでは、と思う。だからあきらめる、というのではなくて、みんなで支えあって、いじめが起こったらすぐに報告して対処するということが必要。学校にある雰囲気みたいなのは重要で、「いじめがあったら、すぐにチクる」という、いわば「チク

りの文化」のようなものが根付けば、躊躇する心が出てきて、抑止力になると思う。

- 「いじめたら、罰を受ける」という外圧的なやり方も、どうしても必要になってくると思う。そのような圧力があることで、いじめをする前に踏みとどまる気持ちにつながるはずである。
- 教師間でも、先輩から後輩へ、ノウハウ的なものを継承していくことが難しくなっているのではないだろうか。
- 子どもがいじめられているのを知って、親は感情任せに動かないほうがいい。加害者やその親に謝罪させても、その仕返しが怖いし、謝罪だけでは解決とは言えないからである。やはりいじめられた子どもがどう思っているのか、どうしてほしいのかを聞いて、一緒に対策を考え、慎重に行動に移すべきである。
- 加害者を罰するというのは対処療法的である。必要なこともあるかもしれないが、それだけでは不十分。学校の中に、加害者と分け隔てなく交流できる大人がいるといいと思う。それは担任の教師である必要はない。他の教師やカウンセラー、養護教員…それ以外でも構わない。その子どもと相性が合い、認める大人がいるだけで、子どもの学校での気分・過ごし方が大きく変わってくるのではないか。
- 学校で対応できることと対応できないことを整理しておく必要がある。法に触れることは警察に関わってもらおう。例えば恐喝してお金を巻き上げたら、それは犯罪で、学校の範疇を超えている。そのようなことは当たり前のこととして、事前に学校内・クラス内で理解を進めておくといいと思う。何でもかんでも学校のせいになれたり、担任のせいにされたりする風潮（例えば恐喝が起こったのは担任の指導不足が原因とされる）が、それを難しくしているので、学校・教師の役割とそうでないことを明らかにしておくべきである。
- いじめへの対応を考えていくことも必要であるが、いじめが起こらない方法を考えることも必要だ。世の中にはいじめがない集団は五万とある。だから「人が集まる＝いじめがある」というのは極端な考え方だと思う。いじめがない集団と、いじめが発生する集団、その違いを研究できればいいと思う。
- 日本は、加害者への対応が少ないのが問題である。